
春の教室～夏休みの教室シリーズ～

ひい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春の教室〜夏休みの教室シリーズ〜

【Nコード】

N6464B

【作者名】

ひい

【あらすじ】

雪人、大学三年生、小春、高校一年生の春のお話です。

第一話 春の嵐（前書き）

このお話は前に投稿した「夏休みの教室」の続編です。なるべくこのお話から読んでも、前からの続きが分かるように書いていきますが、先に「夏休みの教室」を読んでおいた方が、より一層楽しめると思います！ぜひ、読んでみてください！

第一話 春の嵐

春。それは別れの季節。

春。それは始まりの季節。

春。それは……。

「そのキミ！ ぜひ、うちのサークルに入らない？」

「私たちと大学生活を楽しみませんか？」

「今年もこの季節がやってきたかあ……。」

俺、梶山 かじやま 雪人 ゆきと は、大学の校舎へと続く桜並木を歩いている。毎年この時期になると、満開の桜が俺たち学生を向かえてくれる。今年の冬は暖冬だと言われていたので、早く桜が散ってしまうんじゃないかと心配したが、どうやら入学式まで保ってくれたようだ。

そんな桜の木が等間隔に植えられているのと同じように、新入生獲得のため、サークルの連中も等間隔に並んで声を張り上げている。「サークルに入って友達をいっぱい作りませんか？」

「うちは初心者大歓迎！」

風に舞う花びらに混ざって勧誘のチラシも舞う。俺の足元にもはらりとチラシが舞い降りた。俺はそれをひょいっと拾った。テニス同好会のチラシだった。ラケットのイラストが描かれてあった。

「あ、それ私のなんです」

両手にたくさんのチラシを抱えた、こじんまりとした女の子が俺の目の前に現れた。

「……新入生つてのも大変だな」

俺は拾ったチラシを女の子に渡した。ありがとうございます、とその子はぺこりと頭を下げた。すると彼女の両手に抱えられた数十枚のチラシが、頭を下げたためにバラバラと俺と彼女の間に散らば

った。

「ご、ごめんなさいっ」

女の子は耳まで真っ赤にして散らばったチラシを掻き集めた。俺はくすりと笑って彼女を手伝った。

何だか、伊東みたいだな。

きつと今は、高校の入学式に参加しているであろう、俺の大切な人、伊東 小春の顔が頭に浮かんだ。

伊東と出会ったのは高校三年の夏休み。俺の机の中に、伊東の数学の答案用紙が入っていたのがきっかけで、彼女と仲良くなった。彼女は天然な性格のうえに、ドジっ子だった。教室のドアにぶつかったり、ラブレターと答案用紙を間違えたり。ちよっと……いや、かなり間抜けな伊東だけど、俺にとって一番の人になった。

「あの……？」

チラシを拾い終わった女の子が、不思議そうな顔をして俺を見ているのに気が付いた。いかん、いかん。独りの世界にどっぷりと浸かっていたいみたいだ。俺は持っていたチラシを彼女に手渡した。

「あの、もしかして梶山 雪人さんですか？」

「はい？」

急に自分の名前を呼ばれたので、気の抜けた声で返事をしてしまった。

「やっぱり！ こんなに早く会えるなんて、あたしってばツイてる！」

チラシを拾ってあげた女の子が小さくガッツポーズをした。今度はチラシを落とさずにしっかりと掴んでいる。

「えーっと……？」

俺はすぐに記憶の引きだしを開けて見たが、この子の顔がどこにも見つからない。すると女の子が『知らなくて当然ですよ』と、両手に抱えているチラシを鞆に詰めて言った。

「梶山先輩は知らなくても、あたし達はみんな知ってましたよ」

「どういう意味？」

……俺って何かやらかしたっけ？ 急に背中が寒く感じ、サーツと血の気が引いた。真っ青な顔をした俺を、女の子はくすくすと笑った。

「大丈夫です。悪いことで噂になってるんじゃないやありませんから。実はあだし、梶山先輩の高校の後輩で、佐々木^{ささき} 夏美^{なつみ}って言います。ヤマ先生からいろいろ聞きましたよ」

ヤマ先生。俺が高校三年生のときの担任だった先生だ。面倒見がよくて、他のクラスメートからも信頼されていた先生だ。

「そっか、まだヤマ先生、学校にいるんだ。……って、ヤマ先生から何聞いたわけ？」

「梶山先輩と伊東先輩のことですよ」

『梶山先輩、伊東先輩のために頑張ってたみたいですね』と、女の子……佐々木さんは笑って言った。赤の他人に自分のことが噂になっているというのは、とても不愉快なものだけど、出所がヤマ先生となると怒りより恥ずかしさが頂点になる。俺の耳が真っ赤になっってしまった。

「あだし、伊東先輩に憧れてたんです」

佐々木さんの頬がピンク色に染まった。まるで桜の花びらが彼女の頬に溶け込んでいるようだ。

「こんなに好きな人に想ってもらえるなんて幸せだろうなって」

「い、いや、そんな特別なことしてないし」

俺は伊東のことを考えて待っているだけだった。それぐらいしか俺には出来なかった。

心臓が悪かった彼女が手術を受けるためにアメリカへ行ったときも、その手術をしているときも、俺はただただ、彼女の帰りを待っているだけしか出来なかったのだ。

「そんな謙遜することないです。帰りをずっと待ってるなんて、簡単に出来ることじゃないですよ。だからあだし決めたんです」

「決めた？」

佐々木さんはこくと頷き、俺と目が合つと彼女の血色の良い唇

がきゅつと横一文字になった。

「あたし、梶山先輩が好きなんです！」

「……へ？」

予想もしていなかった展開に、俺の心臓が一拍だけ脈を打つことを忘れた。

春の嵐。それは桜の花びら、サークル勧誘のチラシ、そして恋の嵐を引き連れてやってきた。

第二話 小春日和（前書き）

ちよつと忙しくてなかなか更新することが出来ませんでした。お待たせしました。

これからはいぶ、時間の余裕が出来るので、どんどん更新していこうと思います！よろしくお願いします（<―>）

第二話 小春日和

……くん

……誰だ、俺を呼んでるのは？

梶山……君

伊東……か？

ねえ、あの子は誰ですか？

へっ？ あの子？

「おはようございます、梶山先輩」

「わああっ！」

勢い良く飛び起きた俺の後頭部が、佐々木 夏美の額にぶつかった。思わずその場にうずくまる佐々木さん。

「ちよつと痛いじゃないですか！」

「ごめんごめん……って、あれ？」

俺はぱつちりと瞼が開いた目で辺りを見回した。講義開始前はたくさんの生徒で席は埋まっていたのに、今は空席が目立つ。ということは、講義はいつの間にか終わっていたのだ。気付けば、隣りに座っていた親友のユウジの姿もない。

「ぐっすり寝てましたよね」

くすくすと小さく笑った佐々木さんが俺の隣りに腰掛けた。

「あー……やっぱり寝てたんだ、俺」

ははは、と乾いた笑みを浮かべて、目の前に散らばっているノートを鞆に入れた。

「ところで、梶山先輩」

うんつとほつそりした腕を空に伸しながら、佐々木さんは俺のこの後の予定を聞いてきた。

「特に用事はないけど……」

「だったら、あたしとデートしませんか？」

くりつとした佐々木さんの両目が俺の顔を捕らえた瞬間、俺の心臓がどきつと飛び上がった。俺は慌てて胸の辺りに手をやった。

「あのね、佐々木さん。前にも言ったけど俺には……」

「小春ちゃんという彼女がいるんだからねっ」

突然、会話に割り込んできた声はユウジだった。『やつほ』と、ユウジは俺と佐々木さんの間に立った。

「お眠り雪人は、やっと起きたのね」

「あのなあ……。何か忘れ物？」

「あ、冷たい。親友の雪人君を迎えに来たのに」

ユウジが手で涙を拭う真似をした。こういうお調子者な性格は高校時代から変わっていない。

「迎えにつて、梶山先輩はあたしと一緒に帰るんですよ」

ぐいつと俺の腕を掴んだ佐々木さんが俺達の会話に割り込んだ。

……ああ、何だかめちゃくちゃなこと言ってるし。ノリやすいユウジだから、会話が変な方向に曲がっていくような気がする。

「まっ！ まあまあ雪人つたら、アタシという者がいながら。酷いわっ」

俺の心配は当たってしまった。ユウジと佐々木さんは楽しそうに小芝居をうつ。

「まてまて、話が変なことになってる」

あわてて軌道修正をしようとしたが、二人はもう俺の届かない場所にいた。二人はさらに盛り上がり、昼ドラ顔負けの物語へ発展している。って、昼ドラ顔負けってどれくらいドロドロしてんだよ。

「とにかくっ！」

俺はばちんつと自分の両手を叩いた。じんつとした痛みが手の平の骨に伝わった。

「俺は帰るからな」

「あ、待てよ。雪人に伝言」

佐々木さんと盛り上がっていたユウジが俺を引き止めた。

「小春ちゃんが桜並木のところで待ってるよ」

「……は？」

「だあかあ、小春ちゃんがね」

「そういうことは早く言えっ！」

俺は急いで鞆を手に持ち、彼女が待っている場所へと駆け出した。気持ち焦るあまり足がうまく動かず、教室を出るまでに何回か転びそうになった。

「……ほんと、小春ちゃんのことになると変わっちゃうんだから」

俺の後ろ姿を見てユウジが溜め息をついた。

「どうでもいいですけど、ユウジ先輩。あたしの邪魔をしましたよね？」

佐々木さんが有無を言わせない、嫌な雰囲気を滲ませた笑顔でユウジを見た。

ユウジのやろう、そういう大事なことは早く言えっの！

俺は息を弾ませて桜並木へと向かった。毎年春になると、満開に咲き乱れる桜並木。地元じゃ、ちょっとした観光スポットになっていて、日曜、祝日はこの並木道だけ、一般開放されているのだ。

その桜の光景を見て息を飲んだ。

ずらっと並ぶ桜の木の下に、ちょこんと高校生が立っているのが見えたのだ。瞬間、ざあっと春の風が吹き込んで俺は思わず目を伏せた。

「梶山君」

彼女の声が風に舞い上がった桜の花びらのようにひらひらと落ちて聞こえた。ゆっくりと瞼を開けるとそこには、頬を桜色に染めた彼女が恥ずかしそうに笑って立っていた。

「ごめんなさい、連絡も何もしないで来てしまつて……」

「い、いいや、全然、全然大丈夫っ」

何だか恥ずかしくて俺は目を伏せてしまった。

実は彼女と会うのは数週間ぶりだ。高校の入学式前に一回会ってそれ以来、お互いに忙しくて会う機会がなかった。

「でも、ケータイに連絡くれたら俺から迎えに行つたのに」

「……ですよね。やっぱり連絡入れるべきでしたね」

彼女の顔が少し曇ってしまった。ああ、俺のバカ！ そうじゃない、俺が迎えに行きたかっただけなんだ。

「いや、あの、気にしないで……」

俺はぽりぽりと首の後ろを掻いた。気まづくなると出る俺の癖だ。自分から気まづくしておいて、本当俺って何も変わってないなあ。ちよつと……いや、かなり自分に幻滅する俺……。

「この後、何か予定がありますか？」

彼女の可愛い声に我に返った俺は声を裏返して返事をした。

「何も予定がないのなら、あの」

「……そうだな、久々に会つたんだし、どこか行こうか？」

俺の提案に彼女はにっこりと笑顔を返してくれた。

そうだよな。こんなことでへこんでる場合じゃない。俺達は始まつたばかりなんだから。

気を取り直して俺達は桜並木を歩き始めた。ひらひらとゆっくり落ちていく花びらの中を、俺は大好きな人と歩いてる。それだけののに何だか幸せな気分だ。来年もまた、彼女と一緒に桜を見たい……そう願わずにはいられない。

「梶山君の知り合いの方ですか？」

唐突な彼女の質問に、幸せに浸っていた俺は一呼吸置いて返事を

した。

「知り合いの方？」

首をかしげた俺は、ずっと一点を見つめている彼女の目線の先に目をやった。そこには二人の姿があった。その姿とは……。

「梶山先輩！」

元気に手を振る女の子、佐々木さん。その隣りには苦笑いのユウジが立っていた。

第三話 告白（前書き）

ある程度、書き溜めてたものを、書き直して投稿しています。

サブタイトルを付けるのは毎回、考え込んでしまいますね（ - - ; ）

第三話 告白

「じゃ、あたしはこの本日のケーキセット。梶山先輩は何にします？」

そう言っただけの隣りに座っている佐々木さんはメニューから顔を上げた。

「えっと、雪人と俺はコーヒーで。あ、ホットでもいいよ」

ユウジが俺から醸し出している空気を察して慌てて注文をした。

「伊東先輩はどうしますか？」

「え、えっと、じゃあ私も梶山君達と一緒に……」

「じゃ、本日のケーキセットとホットコーヒー三つで」

佐々木さんから注文を受けた店員が、頭を軽く下げて店の奥へと消えて行った。しんとどこか重苦しい四人の空気に、アップテンポな店のBGMが痛々しい。

だいたい何でユウジ達がここにいるんだ？

俺はじろりと目の前に座っているユウジを睨んだ。俺からの怒りの空気を感じているのか、ユウジはこのファミレスに着いてから俺と目を合わせようとしない。ひたすら、佐々木さんと伊東に話しかけている。

だいたい何だ、この席順は？ どうして俺の隣りに佐々木さんがいるんだ？

席順はこうだ。窓側のシート席で、ユウジの隣りに彼女が。そして俺の隣りに佐々木さんがいる。……おかしい。どう見たってこれでは俺の彼女は佐々木さんで、伊東がユウジの彼女じゃないか。

「なあ、なんでここにいるんだ？」

一人もんもんと考えていても仕方がない。俺はユウジに向かって聞いた。俺から声を掛けられたユウジの肩がびくつと震えた。

「いや、ほら、大人数のほうが……楽しい……かなあ……なんて、そんなことないよねえ……」

ユウジは俺と目を合わさずに、きよろきよると辺りに視線をばらまきながら答えた。

「分かってんじゃないかよ。で？　なんで結局来ちゃったわけ？」

「あたしがユウジ先輩に頼んだんです」

伊東と話をしていた佐々木さんがユウジの代わりに答えた。伊東がちよっと困った顔をして俺を見た。

「頼んだって、何で……」

「理由は簡単ですよ。あたしは梶山……」

「失礼しまーす。本日のケーキセットをご注文のお客様？」

良いタイミングでウェイトレスがチーズケーキと紅茶、ホットコーヒー三つを持って来た。佐々木さんが『あたしです』と手を上げた。

「そうだ。あたしのことまだ話してないですよ。実はあたし、梶山先輩たちの高校の後輩なんです」

ウェイトレスが席を離れて、佐々木さんは伊東に話し始めた。

「そっなんですか……」

「はい。高校のヤマ先生って分かりますか？」

伊東がカップに口を付けて頷いた。

「ヤマ先生に梶山先輩と伊東先輩の話を聞いて、あたしすごく感動したんです。一人の好きな人を待ち続けた梶山先輩ってどんな人なんだろーって」

ぽとんと佐々木さんは角砂糖を紅茶のカップに落とし、カチャカチャと小さなティースプーンでかきまぜた。俺たち三人はただ黙って佐々木さんの言葉を待っていた。

「あたし、回りくどいのは苦手だし、陰でこそそするのも嫌いなんで言いますね」

角砂糖が解けて、ほんのり甘い香りを匂わせた紅茶が佐々木さんの喉を通る。俺の喉には生唾が通った。ごくつと生々しい音が体中に響いた気がした。これから続く佐々木さんの言葉に警戒せよ、と頭が鐘を鳴らしている。

「あたし、梶山先輩が好きなんです」

「えっ？」

伊東は目を丸くし、俺はがくつと肩を落とした。ユウジはと言うと、はらはらした表情で伊東と佐々木さんの顔を交互に見ている。

「えっと……」

伊東が額に手をやって考え込んでいる。俺はがたんつとその場に立ち上がった。

「伊東、帰ろ」

「え、で、でも」

「いいから」

俺はちらりとユウジと佐々木さんの方を見て店を出た。その後ろを伊東が慌てて追いかけた。

「……やばい。オレ殺されちゃうかも」

ユウジの顔がみるみるうちに青色に変わっていく。そんなユウジを目の前にいる佐々木さんは、何もなかったように一口大に切ったケーキを口に運んだ。

「……なんでそんなに堂々としてんの？　もしかしたら雪人、夏美ちゃんのこと嫌いになったかもだよ？」

「それなら、好きになってもらうように頑張るだけです」

ぱくぱくと休むことなく、食べやすいように切り分けられたケーキが佐々木さんの体に吸い込まれていく。

「ユウジ先輩」

「え？」

あつという間にケーキを食べ終えた佐々木さんは、カップに残っているぬるい紅茶をぐいっと飲み干した。

「あたし、どうしても梶山先輩じゃないとダメなんです」

空になったカップの底を見つめて、佐々木さんはぽとりと言葉を落とした。

「梶山君！」

辺りはだんだんと暗くなり、空にはぼつぼつと星が顔を見せていた。

「梶山君、待って」

「あつ、ごめん」

くつと服の裾を引つ張られて我に返った。俺の後ろには、少し息が切れている彼女がいた。

「……どこか座ろうか」

俺の目に誰もいない公園が映った。彼女はこくと頭を下げた。心地よい春の夜風がブランコを揺らした。と同時に、ベンチに小さく座っている彼女の髪も揺らした。

「あのさ……」

俺は何から話したらいいのか、いや、何を話したらいいのか迷った。佐々木さんのことは気にするなよ、勝手に向こうが言ってるだけなんだ、誤解しないでくれ……。どの言葉も何だか薄っぺらい。

「梶山君、モテモテですね」

張り詰めた一本の紐が彼女の言葉で緩んだ。

「モ、モテモテ？」

「はい。いろんな人に好かれるのは嬉しいことですよね」

ん？ んん？ 何だかズレてるような気がするけど。俺はちょっと首を傾げた。

「いろんな人に好かれるのは良くないですか？」

今度は彼女が首を傾げた。どうやら本気でそう考えているみたいだ。そんな彼女を見ていたら、今まで自分の中にあった、刺々しい気持ちが丸くなっていくのが分かった。

まいったな、今彼女がすごく愛しい。

そんな感情が俺の心いっぱいに広がった。

「……俺は」

そつと彼女の手に自分の手を重ねた。小さな白い華奢な彼女の手。

すっばりと俺の手に覆われた彼女の手は俺の手を握り返した。

……俺は伊東に好かれてたら、それでいい……なんて、そんな歯の浮いたセリフは恥ずかしくて絶対言えない。でも本気でそう思ってるんだ。あの頃から、君と出会えたあの頃から。

彼女が不思議そうな顔で俺の顔をのぞきこんだ。

「梶山君の顔、真っ赤ですよ」

くすくすと笑う彼女の顔を俺は優しくなでた。

第四話 アメとムチ

「じゃんじゃん食べてね。ほら雪人、これも食べるって」

くたくたの背広を着たサラリーマンや、大きな鞆を肩にかけた部活帰りの学生達が賑わう場所、牛井屋。少し忙しい雰囲気の中、俺は伊東を連れてテーブル席に座った。ここに来たのは、ある人物に呼ばれたからだ。その人物とは……。

「ユウジ、何が目的なんだ？」

目の前に出されたほかほかの牛井に俺は眉間にしわを寄せた。伊東は珍しそうに俺の牛井に見入っている。

ユウジはぱんつと両手を合わせて頭を下げた。

「いや、この前は本っ当に悪かった！ その罪を償おうと思ってさ」
「ほーっ。その償いが一杯二百九十円の牛井ですか。俺と伊東を合わせても六百円にもならない。ワンコインでお手軽な罪滅ぼしですね。」

「いやいや、計算間違ってるよ。正確には五百八十円」

「そこ、威張ってんじゃねーよっ」

俺の真剣なツツコミを、ユウジはけらけらと笑い飛ばした。本当に悪いと思っているんだろうか？ 怪しい……。

「梶山君、これはどうしたらいいんですか？」

俺の隣りでちょこんと牛井を待っていた伊東が、備え付けの紅しようにが入っている容器を指差した。

「これは好みで、すきなだけ入れていいんだよ」

ユウジが俺の代わりに答えた。『すきなだけ、ですか』と、感心した様子で紅しようにを見つめる伊東。太っ腹ですね……と、彼女なら目を輝かせて言うだろう。

「小春ちゃん、牛井屋、初めて？」

「あ、はい。そうなんです」

伊東が恥ずかしそうに笑った。

「女の子はあんまり、こういうところ来ないだろ」

伊東の牛丼がやって来たところで、俺達は箸を取り牛丼を食べ始めた。

「そっか、そうだね。ごめんね、オレ今、金がなくてさ」

「そんな謝らないでください。ご馳走してもらえるだけで充分ですから」

慌てて伊東がユウジに微笑みかけた。俺はその隣りで、けつと悪態を吐いた。

「伊東、いいんだよ、そんなこと言わなくて。たっぷりご馳走してもらうんだから」

「牛丼限定だけだな」

ユウジが歯を見せて笑った。その顔はまっさらで無邪気な少年みたいだ。こういうところがあるから憎みたくても憎めない。なんてお得なキャラしてんだか。

一口、二口と牛丼を口にかき込んで、ユウジが『そう言えば……』と、俺と伊東の顔を交互に見た。

「雪人達って名前で呼ばないんだねえ」

唐突なユウジの言葉に、俺は持っていた箸を落として目を丸くした。隣りの伊東も同じリアクションを取っている。

「は？ 名前で呼んでるよ」

「違う違う。下の名前だよ。雪人は小春ちゃんのことを伊東って呼ぶし、小春ちゃんも雪人のこと、梶山君って呼んでるじゃん」

そう言われてみれば……そうかも。俺は伊東に視線を移した。伊東は顔を赤くして牛丼をつついてる。

「オレが彼氏を差し置いて、小春ちゃんって呼ぶのはなんだかねえ」「じゃ、やめればいいじゃん」

「今さら無理っ」

即答の答えに俺はがたんつとテーブルから肘を落とした。

「私は全然気にしてないですよ」

牛丼を半分食べ終えた伊東が満足げな顔をした。よっぽどこの店

の牛井が気に入ったらしい。目が爛々としている。

「私も梶山君からユウジって呼ばれてるのを聞いて、勝手にユウジ君って呼んでいますから」

「うーん、小春ちゃんみたいな可愛い子に名前で呼ばれるなんて、オレって今すつごく幸せだよ」

はいはい……と、俺はユウジを軽くあしらった。お前は酔っ払い。素面でも酔えるユウジは伊東に話しかける。

「でもさ、小春ちゃんも雪人に小春って呼ばれたいって思わないの？」

「え、えーつと……」

返答に困った伊東は、耳まで真っ赤に染めて器に付いたご飯粒をつついた。

「伊東が困ってんじゃん。変な事聞くなよ」

『こいつは気にしなくていいから』と、俺はユウジを指差した。ユウジが『何だと！』と声を上げた。そんな俺達のコントを見て伊東がくすくすと笑った。

夜空にぼつぽつと星が顔を出し始めている。ユウジと牛井屋の前で別れて、俺達は家に帰る道を歩いていた。

「今日は楽しかったです」

俺の隣りを歩いている伊東が笑って言った。『そつか。そりゃ良かった』と、俺は彼女の笑顔を見て安心した。

この間の佐々木さんの告白以来、俺の心は不安定になっていた。伊東が変な事を考えていないか、悪い何かを考えていないか。前は笑っていたけれど、本当はどう思っているんだろう？

ヤキモチ、妬いてくれてたら、それはそれで嬉しいかも……。

「梶山君、あぶないっ！」

彼女の声が聞こえたと同時に、俺の両目から星が飛び出た。何が

起きたのか分からなくてしばらく時間が止まっていたが、後からじいんとした痛みが額から体中に広がった。思わず額に手をやると、さっきまでなかった違和感がそこにあった。

「うっ、痛い……」

「電柱におでこをぶつけたんですよ。大丈夫ですか？」

彼女が綺麗な桜色をしたハンカチを差し出してくれた。俺は『大丈夫だから』と、ハンカチを彼女に返した。

日頃しない考え事をするもんじゃないな。俺は腫れ物を触るみたいに額の違和感に手をやった。指先が触れた瞬間、ぴりつとした痛みが体を襲った。

でも日頃しない考え事のおかげで、俺はあることを思い付いた。それは、彼女を持つ男であれば必然的に考えることで……。

「こぶが出来てるかも」

「えっ、ちょ、ちよつと大丈夫ですか？」

「……分かんない。俺、鏡持ってないし、代わりに見てくんない？」俺は彼女の目線に合うように背中を丸めた。彼女は踵を上げて心配そうな表情で俺の額に視線を向けた。

「あ、大丈夫みたいですよ。赤くなってるけど、そんなに腫れてないみたいです」

「そっか、良かった……」

そう言っただけ俺は彼女の細い腕を優しく掴み、彼女の唇に自分の唇を近付けた。あと少しで……という距離で彼女がそっぽを向いた。

「だ、だめです」

茹蛸みたいに真っ赤になっている。少し潤んだ瞳が可愛い。

「なんで？」

俺は離れようとせず、彼女の耳に囁いた。

「……梶山君、何だか変です」

「そう？」

「だ、だって、最初の頃はこんな感じじゃなかった、ですよ……」
「伊東がアメリカに行ってる間に変わったのかも。……ね、こっち

向いて？」

そつと彼女の顎に手を掛けた。目線だけは横を向いていたけれど、ちらつと俺を上目遣いに見て静かに目を閉じた。

「可愛い……」

いよいよ彼女の桃色の唇に辿り着く、そんな雰囲気 flowed ときだった。聞き覚えのある声だな……そう認識した時、俺は道の壁に持たれかかっていたのだ。

「え、え？」

意味が分からない。

今までの流れだと、俺は彼女と甘いささやかな時間を過ごしているはずなんだ。

なのに、なんだこの展開は。

どうして今度は右側が痛いんだ。

「……佐々木さん？」

伊東の驚いた声で俺にタツクルを決めた奴の名前が分かった。よろよろとふらつく足に鞭打って、タツクルを決めた佐々木さんの腕を取った。

「何考えてんの？」

こればかりは笑って許すわけにはいかない。なんてったって、恋人同士の甘い時間を邪魔したんだ。それを笑って許せるほど、俺はまだ人間が出来ていない。

しかし、様子がおかしい。佐々木さんはぐったりしていて、自分の力で立ち上がろうとしない。

「おい？」

声を掛けても返事がない。

「どこか怪我をしたのかもしれないです」

伊東が心配そうに佐々木さんの顔をのぞき込んだ。俺も腕から手を放して、その場に腰を落とし、佐々木さんの様子を見た。すると張り詰めた糸が切れたかのように、佐々木さんが声を上げて泣き出したのだ。しかも俺に抱き付いてだ。

「ちょ、ちよつと」

待つてくれよ、今隣りには伊東がいるんだよ。変な誤解されたら困るんだから。

そんな俺の心を知ってか知らずか、佐々木さんの腕に力が入る。

「梶山先輩に会いたかったんです……」

泣きじやくりながらそう話す佐々木さんの目には、白い目で遠巻きに見ている周りの野次馬の目など一切入っていない。

「分かった、分かったから。泣きやんでくれよ」

「梶山先輩いい……」

はいはい……と、俺はどうしようもなくて、ぼんぼんと軽く佐々木さんの背中を優しく叩いた。

叩いた後ではつとした。

ちらつと俺の横にいる伊東に視線を移すと……。

「佐々木さんの家まで送ってあげたらいいんじゃないですか？」

何だか刺がある言い方に聞こえるのは気のせいなのだろうか。いや、きつと気のせいなんかじゃない。伊東の全身から怒りのオーラが見える……ような気がする。

「ま、待てよ。伊東も一緒に……」

「ごめんなさい。今日は早く帰らないといけないんです。じゃ、失礼します」

ぺこりと丁寧に頭を下げた彼女は、さっさとこの場を去ってしまった。

最低だ。

周りの白い目に囲まれて取り残された可哀相な俺と泣きやまない女の子。

最低なシチュエーションだ。

第五話 ふいうち

暗い夜道。俺は何故か彼女でもない、ただの大学の後輩の女の子と歩いている。

……何やってんだろ、俺。

あのまま、泣き出した彼女を放っておいても良かったんだけど、あまりにも大声で泣くもんだから、無視することが出来ず……。伊東は伊東で機嫌が悪くなっちゃったし。

本当、何やってんだろ。

「……梶山先輩」

ぐすつと鼻をすすりながら女の子、佐々木さんは俺の服の裾を掴んだ。

「何だよ」

「……怒ってます？」

「聞かなくても分かるでしょ？」

そりや当然怒ります。俺は女神様でもなければ菩薩様でもない。そう言つてやると、俺の服を掴んでいた佐々木さんの手が放れた。すると突然、

「お、怒らないでくださあいいい！」

どんな感情が込み上げたのか知らないが、やっと泣きやんだ佐々木さんが、また子供のようにわめき出した。俺は慌てて佐々木さんに優しい言葉をかけた。

「わ、悪かったよ。怒ってないからさ。泣きやんでくれよ」

「ほ……本当ですか？」

俺は頭が外れてしまうぐらいに上下に動かして頷いた。もう何も言つまい。早く佐々木さんを帰して伊東に謝らないと。……ひよつとして、今日は厄日なのか？

いろいろハプニングがあったが、やっと目的地である佐々木さんの家に着いた。

「ありがとうございます」

まだ鼻をぐずぐずさせている佐々木さんが頭を下げた。『別にいいよ』と、苦笑いの俺は軽く手を上げて帰ろうとした。しかし、それを佐々木さんの俺を呼ぶ声が止めた。

「なに？」

「あのお願ひがあるんです」

ちらつと上目遣いの佐々木さんは、文句なく可愛らしい。大抵の男ならすぐに落ちてしまっただろう。

しかし、俺は違う。

俺には伊東っていう心に決めた人がいるのだから。

「お願いって？」

早く帰りたい雰囲気言葉を言葉に匂わせながら素っ気ない態度を取った。そんな俺を何とも思わないのか、佐々木さんはゆっくりと俺に近寄って来た。

「あ、前髪に糸屑が付いてますよ」

「え？」

一瞬、俺の目は佐々木さんから自分の前髪に移った。その一瞬、佐々木さんはひょいっと背伸びをして、俺の唇に柔らかい感触を押し付けた。

「……」

何が起きているのか分からない。しかし、この柔らかい感触の正体は理解出来た。唇だ。

俺の目線がスローモーションのように自分の口元に移動した。

「……ちょ、ちよっと！」

勢い良く、佐々木さんの唇から顔を背け、体も離れた。思わず、自分の唇に手をやる。

何考えてんだ、こいつは！？ 目を点にして佐々木さんの顔を見ると、佐々木さんはけろつとした表情で俺を見ていた。

「大丈夫。黙っていれば伊東先輩にはバレませんから」

これがさっきまで泣いていた子なのか？ 今は口元を緩めて笑っ

ている。

「どういうことだよ……」

「あたし、梶山先輩じゃないとダメなんです。だから、あたしの彼氏になってください」

「な、何言って……」

どうしたらいい？ どう言ったら諦めてくれる？

俺の頭には何も言葉が浮かばなかったが、次第に伊東への罪悪感でいっぱいになった。事故とはいえ、キスはキス。俺は彼女以外の人とキスをしてしまったんだ。

「今、伊東先輩のこと考えてたでしょ？」

すっかり泣きやんだ佐々木さんが、俺の顔をのぞき込んだ。

「と、とにかく。俺は駄目だから。彼氏なら他を当たって？ 佐々木さんだったら、俺より良い人に会えるよ」

ありきたりなセリフだ。だけど、今はこれしか浮かばない。……もう帰りたい。今日は本当に疲れた。

「梶山先輩より良い人なんて……いません」

ぼつりと呟くように言葉を落とした佐々木さんの表情が、さっきまでの笑顔から悲しそうな表情に変わった。それはとても切なくて、俺の心がぎゅうつと締め付けられた。

「佐々木さん？」

「や、やだ、先輩。何マジメな顔してるんですか？」

俺の呼び声に、はっと我に返った佐々木さんは、悲しい表情を打ち消し、いつもの笑顔に戻った。

「そ、そろそろ家に入らないと親がうるさいですから」

『じゃあ、また明日学校で……』と、佐々木さんは玄関のドアを開けて家の中に入っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6464b/>

春の教室～夏休みの教室シリーズ～

2011年1月1日22時28分発行